

## 生涯 84 年一貫教育

### ～ 学習指導要領に足りないもの、キャリア教育が補うもの① ～

「日本人の平均寿命って男性が 81 歳で、女性が 87 歳なんだそうです (残り何年ですか? (笑))。これが「平均」って!!!…で、性別をひっくりめると 84 年。日本に暮らす人は平均 84 年の人生を「一生感動。一生青春。」するんです (図 1)。でも、84 年という時間はとても長いので、乳幼児期(0～5 歳)、学童期(6～12 歳)、思春期(13～18 歳)、青年期(19～39 歳)、壮年期(40～64 歳)、高齢期(65 歳以上)といった「節目」を設定して、人生の段階を捉えたりしますよね。



図 1 「節目」なく続いていく 84 年

「さて、学校教育、特に特別支援学校においては一般的に「小学部 (本校ではさらに「小低」・「小高」)」、「中学部」、「高等部」という「節目」に分けていますよね。実はこの「節目の設定」にメリットとデメリットがあるところから副題の「学習指導要領に足りないもの、キャリア教育が補うもの」が見えてきます。「まず、「節目」のメリットについてです。学部や学年の「節目」があることによって、ある程度のもたまりをもった「ライフステージ (生活年齢に応じた段階)」を意識することができます (図 2)。例えば「小高さんになったらチャイムで動けるようになるうね」とか、「中学部に行ったら腕時計をしようね」等々。

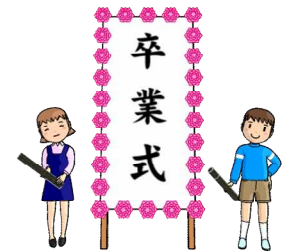


図 2 「節目」の意識にはメリットも沢山

「一方で、「節目」にはデメリットもあって、本来的には切れ目無く続いている子どもたちの生活を分断して、急な変容を強いてしまう側面もあります。例えば「小高になると厳しくなる」という保護者間のうわさや、「中 1 ギャップ」、高等部に入ると急に礼節を意識し始める…などが挙げられます。この「節目による分断」が学習指導要領の (学校教育の) 一つ目の「弱点」です (図 3)。

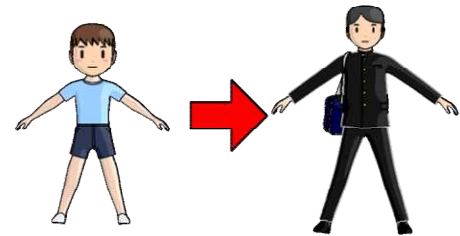


図 3 「節目」のデメリット。「分断」

「また、第 3 の観点からになります、私たちの肌感覚として、教員間でも「小低の先生」と「小高の先生」、「中学部の先生」、「高等部の先生」には考え方の違いを感じることが少なくないですよね。もっといえば、学年団でも…。これは大人サイドですが、「学部」や「学年」という「節目による分断」のデメリットがそこにもあります。



図 4 キャリア教育は「トッピング」

「さて、この「学習指導要領の弱点」に当たる「節目による分断」を補うべくして、満を持して「キャリア教育」が登場します (図 5)。キャリア教育の長所は「節目を越えて、教育内容の系統性 (順序を追って積み上げていくこと) や一貫性 (教育内容が迷走しないこと) を補う下位目標 (前号参照) を出せるところなんです。キャリア教育を取り入れることで 12 年間 (もっと言えば 84 年間) という長い時間軸を見渡して、「節目による分断」という学習指導要領の弱点を補うことができます。



図 5 キャリアスイッチ(再掲載)

「最後に前号の内容も含めてまとめます。日々の授業は「学習指導要領」の内容のみで十分に回ります。「素うどん」だけで「そこそこ美味しい」のです。しかし「キャリア教育」というトッピングをすることで、「節目による分断」という「学習指導要領の弱点」が解消されます (図 4)。物足りなさが解消されて、「とっても美味しくなる」なるわけです。具体的には右の「キャリアスイッチ (前号参照)」を使うことで、節目を越えた視点 (下位目標) が得られます。 (図 5)